

ヴァレリー・ラルボーの語り手における « nous » の問題

瓜生 濃世

はじめに

ヴァレリー・ラルボーのいくつかの作品において、「je」という一人称単数の代名詞に対する困惑が見られる。例えば『バルナブースの日記』(*Journal intime*)においては主人公が「je」で示すことのできない現在の自分を描写しており⁽¹⁾、『秘めやかな心の声』(*Mon plus secret conseil...*)では主人公が内的独白のなかでしばしば「je」の代わりに「tu」や「il」といった二人称・三人称単数の代名詞を用いている。そして短編集『めばえ』(*Enfantines*)に収められている『夏休みの宿題』(*Devoirs de vacances*)の主人公の少年は「je」ではなく「nous」を用いて語り、中篇小説『フェルミナ・マルケス』(*Fermina Márquez*)においては語り手である「je」の登場が極端に少なく、「nous」が基調となって物語が語られる。日記形式や内的独白といった手法の実践から、文学創作において個人の主観や内面描写を重要視することで知られるラルボーだが、本稿では『夏休みの宿題』と『フェルミナ・マルケス』において彼が「je」の使用を制限し、代わりに「nous」を用いた理由を検討したい。

1. 『夏休みの宿題』における単数の « nous »

この短編の主人公は « nous » を用いて語るのだが、その指示対象は一定で

はない。「nous」はある時は主人公を含む夏休みをむかえた子供たち、もしくは一般的な意味での子供たちであり、またある時は主人公であるひとりの少年を意味する。つまり、主人公の少年は自分ひとりに関する事柄を述べる時も«je」の代わりに«nous」を用いている。文法的規則から区別可能なそれぞれの例、つまり複数の«nous」と単数の«nous」を冒頭部分から見てみよう。

第一段落に現れる«nous」は、主語となっている複合過去の文章のなかでもêtre動詞に続く過去分詞が複数形で一致されている文章があることから、主人公の少年をはじめ彼と同じようにヴァカンスの前日にお店で買い物をした子供たちを指していると思われる：

Nous étions allés de bon matin acheter tout cela aux Magasins du Louvre, la veille du départ. (p.480)

だが同じ段落の最終文では、「nous」に対する形容詞が単数形で一致されている。すなわち今度は単数人称、主人公の少年ひとりを示す代名詞として使われていることがわかる：

Non, même pas alors ; mais quand *nous serions licencié*, ou docteur, ou même — qui sait — auteur... (p.480)

続く第二段落中では«nous」はいったん消え、「on」と共に七月のパリの風景が描写される。第三段落で«nous」が再び現れるが、複数か単数かを区別できる指標は不在である。だがすぐに、その次の段落において単数人称としての«nous」を見出すことができる。というのも再び形容詞が単数形で一致されているからである：

Mais maintenant c'étaient les grandes vacances, et puisque *nous allions*

être libre, puisque plus rien ne nous y obligerait, nous allions travailler de tout notre cœur.[...] *Nous étions tellement rassasié* de liberté et de jouissances, que nous cherchions d'instinct la jouissance suprême, qui consiste dans l'activité pure et désintéressée de l'esprit. (pp.481-482)

このように過去分詞や形容詞の形から、「nous」が示す対象がこの短編においては単数と複数の2種類存在することは明確である。さらに別の判断基準を探してみると、「nous」に対する呼びかけのせりふに使われる人称の形が挙げられる。例えば次の箇所では、「nous」が回想する同級生のせりふにおいて「nous」に対する質問に「tu」が使われており、この場面は主人公であるひとりの少年に固有の体験だということがわかる：

L'étude, l'amitié, et la paix. Nous serons en paix, puisque nous savons que notre ami est avec les siens, à la mer. Au collège, nous tremblons toujours. [...] Mais non, il ne songe même pas à cela : [...] ; et puis il revient à la place où nous l'attendons, et *nous dit en riant* : « *Qu'est-ce que tu as?* » (p.485)

また同じような例として、いとこマチュー「notre grand cousin Mathieu」が主人公「nous」に対して「toi」を使う場面も挙げられる：

« *C'est à toi*, ce bouquin-là, le Leibniz? [...] »

Et en effet, *nous* avons lu deux fois la « Monadologie » et *nous* n'y avons pas compris grand'chose. (p.488)

他者の言葉のなかに見られるこうした二人称の呼びかけによって、単数である主人公「nous」の存在はさらに明らかである。「nous」には単数人称として

の用法が存在するので、これは特別に奇妙な現象ではないが、ラルボーはなぜ « je » ではなくあえてこの一人称複数形の代名詞 « nous » を選択したのであるのか。

まず主人公の少年が持つ「子供」というカテゴリーに対する連帯感や、「子供」全体に付随するイメージを喚起させる効果を指摘することが可能であろう。あるいは大人や両親に対して反発心を抱く主人公の少年の、「子供」側の代表としての心情を表しているとも思われる。事実、次に見られるような箇所では « nous (主人公の少年) = tous les enfants » という図式が見られる：

Ah! vraiment *nous n'étions bon à rien*, et Papa et Maman avaient raison quand ils nous disaient que nous ne ferions jamais « rien de propre »... *A l'âge que nous avons, tous les enfants sont laids et désagréables.* (p.502)

だがしかし、主人公の少年を表す « nous » は常に大人の対立項として現れるわけではない。学校で孤立しがちな主人公にとって、時にそれは同級生達とは異なる自分を表すものでもあるのだ。次の場面では再び « nous » に続く形容詞が単数形で一致され、主人公ひとりが同級生達と対比されている：

Nous, en particulier, nous étions plus fermé, plus « ingrat », plus désarmé devant les grandes personnes que la majorité de nos camarades. (p.503)

このように « nous » は様々な内実を伴う。主人公 « nous » は、ある時は同級生や一般的な「子供」を含む複数の « nous » として現れ、ある時は単数の存在として独立して現れる。ところで Stéphane Sarkany は、この作品で用いられている « nous » をふたつの « moi » を内包しているものとし、それは少年

時代の夏休みを思い出している大人の « moi » と思われている子供の « moi » の融合であると分析している：

Dans une autre pièce, les *Devoirs de vacances*, le narrateur assume encore plus de communauté affective avec le héros, si l'on peut dire. Contaminant les deux « moi's », celui de l'adulte qui se souvient, et celui de l'enfant dont on se souvient, il relate l'histoire en première personne du pluriel. ⁽²⁾

この分析に従うならば、主人公（少年）のみを示すというその単一的性質から « je » を避け、少年だけではなく作者（大人）の存在も暗示する、つまり視点の二重性を示すためにラルボーが « nous » を用いたと考えられるであろう。物語を語るのは少年であっても、その言葉の中には作者の大人としての視点が機能していることを示さずにはいられない、つまり作品中描かれる「子供」とそれを描く作者の「大人」の融合がラルボーにとって重要であることが « nous » という代名詞の選択によって示されているというわけである。だが先ほど述べたように、この短編の « nous » には「大人－子供」という通時的二重性のみならず、「子供全体」という共時的広がりがかめられていることも忘れてはならない。ラルボーは « nous » をあるひとつのカテゴリー内の、不特定の対象たちへの広がりを含む言葉としても使っている。ただし、『夏休みの宿題』においては、ラルボーはむしろ前者の機能——「大人－子供」の « nous » ——をより強く意識しているのではないだろうか。なぜなら « nous » は « nous » の個人的事柄を多く語っており、実際物語の中心となっているのはこの単数の « nous » であることが明確だからである。逆に、次に扱う『フェルミナ・マルケス』における « nous » は、後者の機能、つまり対象の広がりを持ち合わせた、複数の存在を示す機能を尊重して選択されているように思われる。

II. 『フェルミナ・マルケス』における不均質な « nous »

『フェルミナ・マルケス』は、パリ郊外にあった聖オーギュスタン学校での思い出が複数の視点から語られる形式となっており、「この物語を書いた」
 « j'avais écrit une grande partie de cette histoire »(p.388) と表明する « je »
 個人の登場場面は極端に少ない。しかもこの作品は、自分自身も聖オーギュスタン学校の生徒であった書き手 « je » の思い出ではなく、ジョアニ・レニオという少年やその他の生徒たちを中心として « nous » を基調に記述されている。物語は « nous » で始められ、「je」が時折登場し、ジョアニ・レニオ、カミーユ・ムーティエ、そしてフェルミナ・マルケスといった登場人物へと視点は移り変わり、それぞれの心理を描写しながら進んでいく。

まずは « nous » によって語り始められる冒頭部分を見てみよう。「 nous » が初めてフェルミナを見る場面である：

Le reflet de la porte vitrée du parloir passa brusquement sur le sable de la cour, à *nous* pieds. Santos leva la tête, et dit : « Des jeunes filles. »

Alors, *nous* eûmes, tous, les yeux fixés sur le perron, où se tenaient, en effet, à côté du préfet des études, deux jeunes filles en bleu, et aussi une grosse dame en noir.(p.309)

この « nous » という複数形の人称で始まる事実が、物語に対する複数の視点の存在を暗示しているとも言えるであろう。この冒頭で現れる « nous » とは、「 une bande d'effrontés »(p.309) —— 聖オーギュスタン学校に在籍する 16～19 才の不良少年グループ——である。このグループのメンバーは、学校の規則に反することなら何でもやってみたいような大胆な生徒たちであり、リーダー格の少年でメキシコ人のサントスとその仲間たち（弟のパブロ、黒人少年ドゥ

モワゼル、カステイーリャ生まれのオルテガなど）に、コスモポリットな聖オーギュスタン学校では「少数派」であるフランス人生徒たちである。次に見られる « nous » は、そのようなサントス達と区別された「フランス人である私たち」を強調する為に使われている：

Nous n'étions pas élevés à la française, et, du reste, *nous Français*, nous n'étions qu'une bien faible minorité dans le collège ; [...].

Ceux qui disaient cela (Santos et les autres) formaient une élite dont tous les élèves exotiques (Orientaux, Persans, Siamois) étaient exclus, une élite dans laquelle, pourtant, *nous Français* étions admis [...].
(pp.309-310)

このように « nous » が « je » をはじめとする « nous Français » と「サントスたち」で構成されるという説明は、すでにこの作品における « nous » という代名詞の不均質性を浮き彫りにしているように思われる。

さらに « nous » はまた別の構成を持つ。冒頭の « nous » の中にはサントスやその他に名前を挙げたような彼の仲間たち、そして時おり現れる « je » 以外に特定される人物はいないが、そうした名前を持たないメンバーは確かに存在して様々な価値観を共有し、言葉を交わす。だがそれはサントス、もしくは彼とドゥモワゼルを除いた « nous » の発言である場合があるのだ。例えば次のような « nous » の発言は、明らかにサントスとドゥモワゼルを除いた視点から発せられたものである：

Nous nous disions : « Si quelqu'un doit l [Ferminal] 'avoir, c'est Santos qui l'aura ; à moins que *Demoiselle*, ce sauvage, ne la prenne de force dans un coin du parc. » (p.313)

ここでは同時にフェルミナが存在を知り、同じように恋心を抱いたはずの「nous」からサントスやドゥモワゼルは切り離されて、「nous」はまるでひとつごとのように彼らの話をしており、冒頭の「nous」とは内容が異なっているのがわかるであろう。ところで「Nous nous disions」で挿入される、この複数の間で発せられたはずの言葉は、ひとつのまとまった意見として単独で紹介されている。発話者も聞き手も特定されないこの言葉によって、「nous」の輪郭は少しずつその形を失っているように思われる。この「nous」からはサントスたちは除外されており、一方でこれに所属しているはずの語り手「je」は（数は少ないが）独立した個人として単独で登場する場面があることを考慮すると、やはりこの「nous」という存在はより曖昧なものとして変貌しているのではないだろうか。「je」の意見ではなく「nous」のものだと示されることで、この言葉の発信源はぼやかされている。

次に見られる「nous」は、また別の意味で使われている。それは「on」が隣接して現れる、一般的な人々という意味を帯びた「nous」である。聖オーギュスタン学校の「nous」10名ほどはフェルミナの散歩に従者のように付き添うようになったという説明の後、少女や女性・人生について述べられる場面で、「nous」と「on」が見られる：

Mais, comme *nous* ne pourrions jamais voir clair en *nous*, connaissons-*nous* jamais cette part de l'autre sexe que *nous* contenons tous, et toutes? *C'était notre erreur à vingt ans*, de croire que nous connaissions la vie et les femmes. *On* ne connaîtra jamais ni la vie ni les femmes, il n'y a, partout, que des objets d'étonnement et une suite ininterrompue de miracles.(p.322)

この「nous」が20才で人生と女性を知った気でいたのは間違いであった」というくだりは、すでに見た説明によると聖オーギュスタン学校の生徒グルー

プ「nous」はまだ20才以下なので一般論であるとも思われるが、過去形で語られていることを考慮すると、過去に存在したある特定の状態、つまりその「nous」が20才になった時の状態、を内包しているとも考えられる。そしてその次の文で「on」が主語に選択されているのを見た時、さらにその考えは強まるのではないだろうか。というのも過去の教訓から一般論を引き出しているように思われるからだ。当初19才以下の聖オーギュスタン学校の少年グループを示していた「nous」は、いつのまにか時間を超えて20才になった彼らをも指し示す。それになおかつ、直後に「on」に接続されるような不特定性がうかがえることから⁽³⁾、その対象はもはや彼らだけに限定されていないと思われる。ここで「nous」という領域が瞬間的に拡大されているのがわかるであろう。

いったん「on」を主語に置いたこの一般論の直後、再びサントス、そして聖オーギュスタン学校の生徒たちである「nous」が現れ、時間は巻き戻される。そして再び現れる「nous」の言葉は、またも断片的なものである：

Santos croyait avoir appris à connaître les femmes, dans les cafés de Montmartre ; et *nous* aussi, qui n'étions allés — et rarement encore — qu'à des parties et à des thés chez nos correspondants de Paris, *nous aussi nous disions* : « Voilà bien comme sont les femmes. » (p.322)

この「nous」はサントスを除いたグループとして現れ、複数が発したはずの言葉は再びひとつのものとして提示される。複数の人間の声がかうしてひとつの声として現れているその簡潔さから、発言の一般性の高さ、そして「nous」の具体性の喪失と無意志的な存在性がうかがえる。

E.パンヴェニストは、「「nous」は「je」の上に他の人々の不明瞭な総合的全体を付加する」⁽⁴⁾と説明しているが、『フェルミナ・マルケス』に現れる「nous」はまさにそのような「ぼやけた輪郭」を持ち、様々に変化している。

ある時は「je」やサントスその他名前を持たない不良少年たちのグループであり、ある時はサントスやその仲間を除外した少年たちであり、またある時は一般的な意識のかたまりとして現れる。それは回想される聖オーギュスタン学校を覆っていたひとつの世界観の体現そのものでもあろうし、また同時代を生きていた少年たちというカテゴリー全体を内包するかのように、その輪郭は自在に変化している。バンヴェニストはまた一人称複数の代名詞が持つ包括性と排除性の存在を指摘しているが⁽⁵⁾、この作品においても「je」やサントスを含む「nous」は語りの内部に組み込まれている排除的な存在である一方で、時にその境界を失い、対象が外部へと広がる一般的・包括的な存在ともなっている。そしてそこに広がる世界は書き手「je」によって支配された単一で内的な空間ではなく、重層的なものとなっているように思われる。⁽⁶⁾

Ⅲ. 過去には存在しない「je」

前章で述べたように、『フェルミナ・マルケス』最終節で「この物語を書いた」と表明する「je」は、その回想において「je」ひとりに関する思い出の記述を極端に制限している。逆に言うと、過去の思い出は「nous」で表明するもの、あるいは共有するものであるという意識がそこからうかがえるのではないだろうか。『フェルミナ・マルケス』において書き手の「je」が現れる時の大部分は、現在大人になった自分自身の視点で考えを述べるにとどまり、その他には例えばジョアニ・レニオに関するエピソードの折に、自分も同じように優等生だったと二言三言言葉を漏らすだけであって、「je」が送った少年時代の個人生活は具体的には語られない。複数の声「nous」で語りうることできた少年時代、そこで他者と共有していた世界観は消滅し、大人になった現在は「je」で表す存在となつて、ひとり孤立した自分を見出しているだけなのであろうか。ここで短編集『めばえ』に収められている『ひとりぼっちのグウエニー』（*Gweny-toute-seule*）の主人公が述べる「大人の世界にはなじめない」

という言葉を思い起こしておこう：

Car j'ai assez de jouer à la grande personne depuis des années. Je m'y prends trop mal. J'ai essayé de m'intéresser à leurs idées, à leurs histoires, je n'ai pas pu. J'ai essayé de partager leurs manières de voir, leurs passions sérieuses, leurs ambitions ; je n'y ai pas réussi. J'ai tort peut-être. (p.531)

この主人公は子供の世界をこよなく愛する大人の男性である。大人の社会に対する嫌悪感はラルボー自身も持っていたもので、彼の世界観を形成する重要な軸である。この男性の主張に代表されるような大人になると課せられる孤立感の存在は、ラルボーの小説において「je」ではなく「nous」が用いられている現象を理解するひとつの鍵となるのではないだろうか。少年が主人公である『夏休みの宿題』が「nous」で語られ、『フェルミナ・マルケス』において少年時代が「nous」を基調に語られる一方で大人になった「私」が「je」で現れるという記述は、大人となって他者とは完全に差別化された「je」という存在への意識が働いているように思われる。

おわりに

以上、ラルボーの作品において「je」が避けられ「nous」が用いられている例に注目し、彼が「nous」に期待していたと思われる機能について検討した。また、「je」の使用に関して「大人となった語り手」という側面も挙げた。今回は一人称の代名詞を取り上げ、作品を『夏休みの宿題』と『フェルミナ・マルケス』に限定したが、人称の問題を扱うにあたってさらに分析対象を広げなければならないのは明らかであろう。今後の課題としたい。

使用テキスト：

Valery Larbaud, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957.

引用後の丸括弧内にページ数を記した。なお、引用文中のイタリックによる強調は全て筆者による。

注：

(1) 主人公バルナブースが次のように述べる場面がある：「L'image que chacun se fait de soi-même : comme on la voit du premier coup d'œil, chez les hommes mûrs! Chez moi elle n'est pas encore formée, voilà tout, — et c'est ce qui me fait croire à la sincérité de mon analyse personnelle. Mais avec les années mon personnage se fixera sans doute ; alors j'écrirai « Je » sans hésiter, croyant savoir qui c'est. Cela est fatal, comme la mort... » Valery Larbaud, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957, p.94.

(2) Stéphane Sarkany, « L'Art des *Enfantines* de Valery Larbaud » in : *Colloque Valery Larbaud*. Paris, A.G.Nizet, 1975, p.236.

(3) 例えば A-H. Pierrot は「on」を「カメレオンのような代名詞」とであると説明している。ここでは「nous」をそうしたより汎用性の高い代名詞で言い換えた現象に注目したい。

Anne Herschberg Pierrot, *Stylistique de la prose*, Belin, Paris, 1993, p.27.

(4) Emile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard, 1976, p.235.
 « Le < nous > annexe au < je > une globalité indistincte d'autres personnes. »

(5) *Ibid.*, p.233. « On sait bien que, dans les pronoms personnels, le passage du singulier au pluriel n'implique pas une simple pluralisation. De plus, il se crée en nombre de langues une différenciation de la forme verbale de l'1^{er} plur. sous deux aspects distincts (inclusif et exclusif) qui dénonce une complexité particulière. »

(6) 『フェルミナ・マルケス』は元々ラルボー自身の寄宿学校での思い出から構想された作品であり、登場人物のジョアニ・レニオとカミーユ・ムーティエそれぞれにラルボー少年との類似点が見られる。これら二人と書き手の「je」を合わせて三人に自己投影を分散しているところにもラルボーの重層的な世界観への意識がうかがえる。『フェルミナ・マルケス』とラルボーの少年時代の関係については、次の論文を参照：岩崎力、「ヴァレリー・ラルボーの世界 — *Fermina Márquez* をめぐって —」、『東京外国語大学論集』第12号、1965年、pp.1-17.

(博士課程後期課程)